陸奥話記の主役

盛岡に刻まれた歴史の足跡

伝説あれこれ　安倍氏①

前九年合戦の決戦場

安倍氏は奥六郡（胆沢、江刺、和賀、稗貫、志波、岩手）、さらにはその北方の青森、北海道方面に交易ルートを持ち、厨川柵は軍事拠点であると同時に北方交易の拠点だったと考えられている。北に影響力を確保し、南への勢力拡大を狙い衣川の関を越えようとしたところで朝廷はストップをかけた。これが引き金となって前九年の合戦が始まった。

「陸奥話記」によると、安倍氏は忠頼、忠良、頼良、貞任・宗任兄弟と続き、代々俘囚（ふしゅう）の酋長（しゅうちょう）であり、その勢力は大いに振るい各村は皆従っていたとある。

朝廷軍との戦いでも当初は優勢を保っていたが、朝廷が秋田の俘囚清原氏を取り込み、戦わせたことで風向きは変わった。奥六郡に展開する安倍氏の拠点は次々に攻略されていった。

康平5年（1062年）に、盛岡市北西地区は前九年合戦最後の決戦場だったと伝えられている。安倍貞任・宗任兄弟は最後の拠点として厨川柵・嫗戸（うばと）柵に籠もり、源頼義・義家親子の軍との死闘の末に柵が焼け落ちた。貞任は殺され、弟宗任は捕らえられた。

盛岡市内には前九年合戦にまつわる伝説が数多く残されている。主なものを幾つか挙げる。

陣中見回りをしていた貞任は、手に持っていた杉の木の杖（つえ）を逆さに突き刺したまま立ち去った。その杖が根付き大木になった。

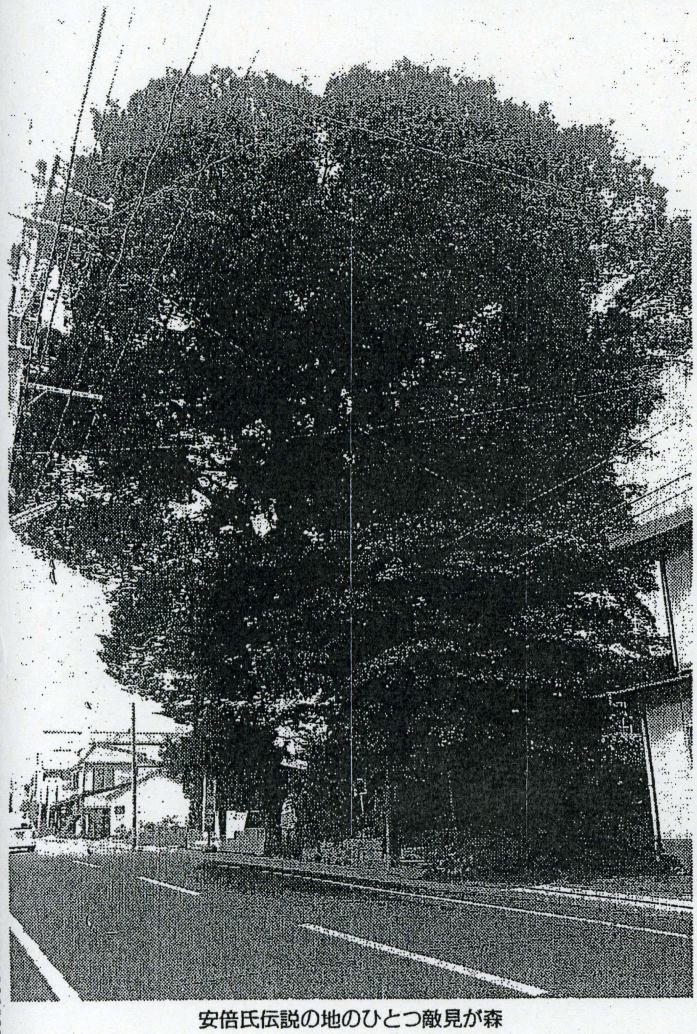
機織沼の伝説がある。沼のそばを通るとトントンパタリと機を織る音が聞こえ、夕方になるとすすり泣きが聞こえる。沼に飛び込んだ厨川柵の女たちが沼の主になった。

館坂から前九年に至る中ほどの小山を敵見が森と言う。狐森稲荷神社が祭られている。安倍氏はここに櫓（やぐら）を組み敵を見張り、戦いが激しくなると奥方がたくさんの女たちを連れて、これに登り歌い踊り大声を上げ、必死になって味方を励ました。

夕顔瀬の伝説は、瓜の夕顔に人の顔を書き、ワラで作った人形に着せ、兵士が大勢いるように見せかけた。

諸葛川の伝説は、厨川柵の西方を流れる川に夜「籾糠」を流した。頼義軍は陸地だと思って次々に川に落ち、大勢おぼれ死んだ。後に、この川を「籾屑川」（もみくずがわ）と呼ぶようになりそれが諸葛川と呼ばれるようになった。

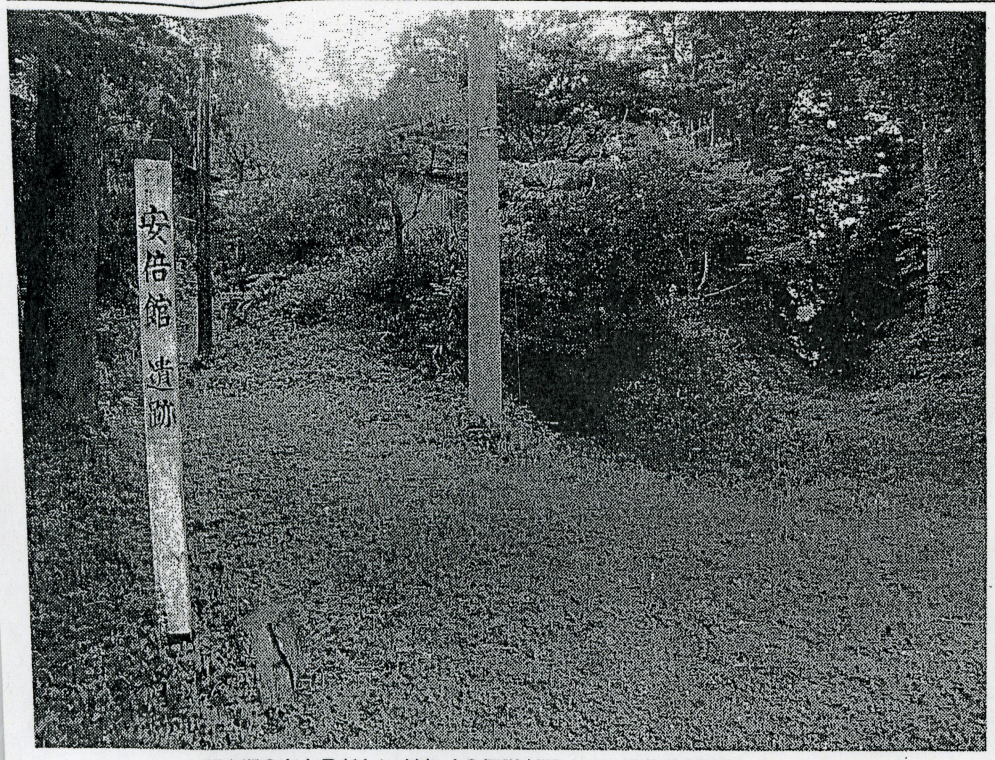
（荒川聡記者）



安倍氏伝説の地のひとつ敵見が森

盛岡に刻まれた歴史の足跡

拠点12カ所　安倍氏②



平安期の出土品がないが多くの伝説が残っている安倍館遺跡

厨川柵はどこか

安倍氏の拠点は奥六郡に12カ所あり、それぞれに一族を配して支配していたと考えられている。盛岡地域では安倍宗任の厨川柵、関連する嫗戸（うばと）柵がある。厨川柵は天昌寺町の里舘遺跡、嫗戸柵は安倍館町の安倍館であると考えられ、長く定説のように言われてきた。ところが幾度も行われてきた発掘調査で安倍氏時代の11世紀の出土品は全く出てきていない。

盛岡市遺跡の学び館の室野秀文さんは「里舘遺跡は1981年の調査、92年にもだいぶ掘っており、そのあたりになって里舘は中世の城郭だということが分かってきた。安倍館についても86、87年から92から94年にかけての調査で、出てきた建物跡、陶磁器などからすると、里舘は13世紀も多少はあるが15から16世紀、安倍館については15世紀のものが1点だけ出ている」という。

「両方とも中世の工藤氏に関する城館だろう。安倍氏のものが多少なりとも出てくればいいが、特に安倍館は80カ所以上掘っており、それだけ掘って出てこないとなれば、安倍氏の遺跡ではないと判断せざる得ない」と、室野さんは語る。

これらの調査結果は安倍氏研究の場面で使われることは少なく、従来の安倍館、里舘の説は現在も根強い。

「わたしたち考古学をやる者は、調査結果からそう判断しているが、文献を主体とする研究者の方たちは素直に受け入れていないと思う。発掘の結果は事実だが、それが十分に活用されていないことが原因だと考えられる」と、室野さんは話す。

厨川、安倍館、前九年などの地名、安倍氏の存在を印象づける数多くの伝説が盛岡地域にはあり、これらには区の郷土史家・太田忠雄さんは南部氏の時代に盛岡城を守る霊山で修行する山伏たちにより広まっていったと考えている。

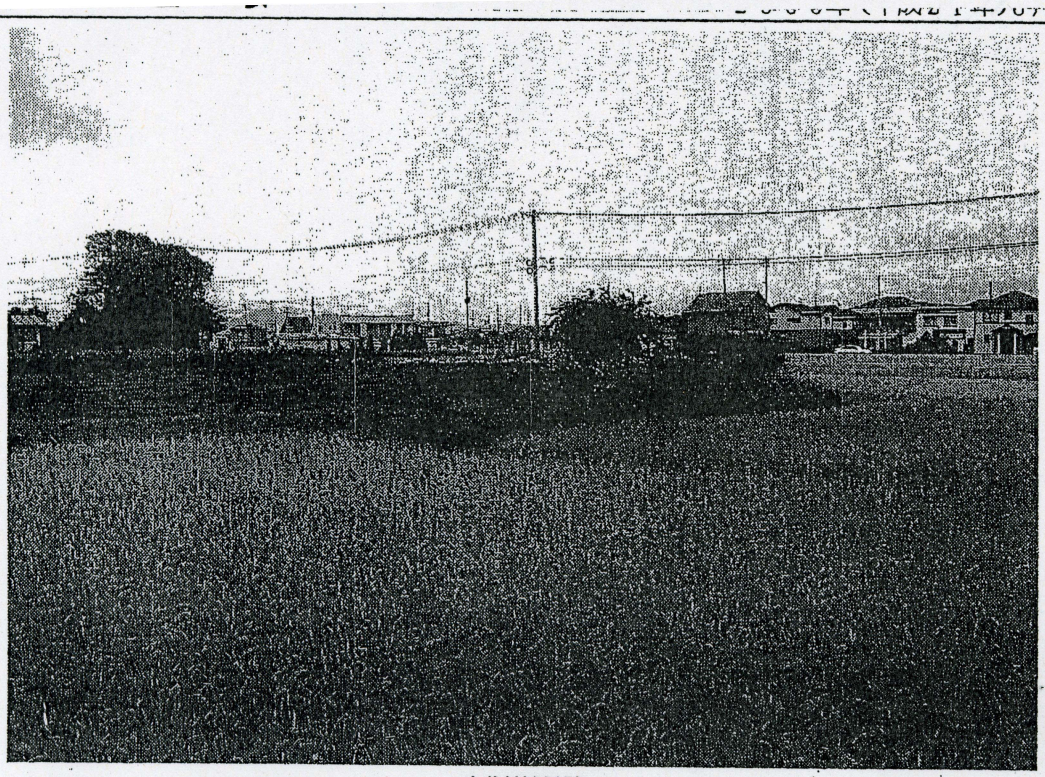
（荒川聡記者）

検出遺構の時代は符号

厨川柵とはどこか

盛岡に刻まれた歴史の足跡

大釜舘遺跡　安倍氏③



大釜舘遺跡跡

断崖はどこに

厨川柵とはどこか―。盛岡ひすとりーの大村みつ子さん、秋田岩手横軸連携交流会の大畠政夫さん、玉山区の郷土史家太田忠雄さん、国交省岩手河川国道事務所元職員の米沢谷誠悦さんらの協力を得て検証することにした。

最初に候補に挙げたのが滝沢村にある大釜舘跡。11世紀の坏（つき）や小皿がまとまって出土している。この場所には、時代を下って中世に紫波郡を支配していた斯波氏（足利氏の一族）の家臣大釜氏が舘を構え、北東に隣接する地域には掘立柱建物群、関連するとみられる村落の遺構が見つかっている。

安倍氏時代の遺跡であることは確かだが、厨川柵と断定するには物証は十分ではない。

当時の状況を地形に求めるなら、雫石川の流れの変化について知ることがポイントになると考えた。国土地理院が旧建設省から委託を受け1969年に作成した河道跡や両岸の地形などを記した「治水地形分類図盛岡・小岩井農場周辺」（以下川跡地図）地図を参考にした。

川跡地図によると、雫石川左岸の大釜付近から3川（北上川、雫石川、中津川）合流地点までは、大釜駅から東林寺にかけて半島のように台地が突き出し、稲荷町は田沢湖線付近まで、上厨川、前潟、大沢川原、盛岡駅周辺一体は川が流れていた時期があったということが分かった。台地は北天昌寺町、大館町、大新町、前九年、夕顔瀬町付近まで続き、これらの地には安倍氏伝説が存在している。

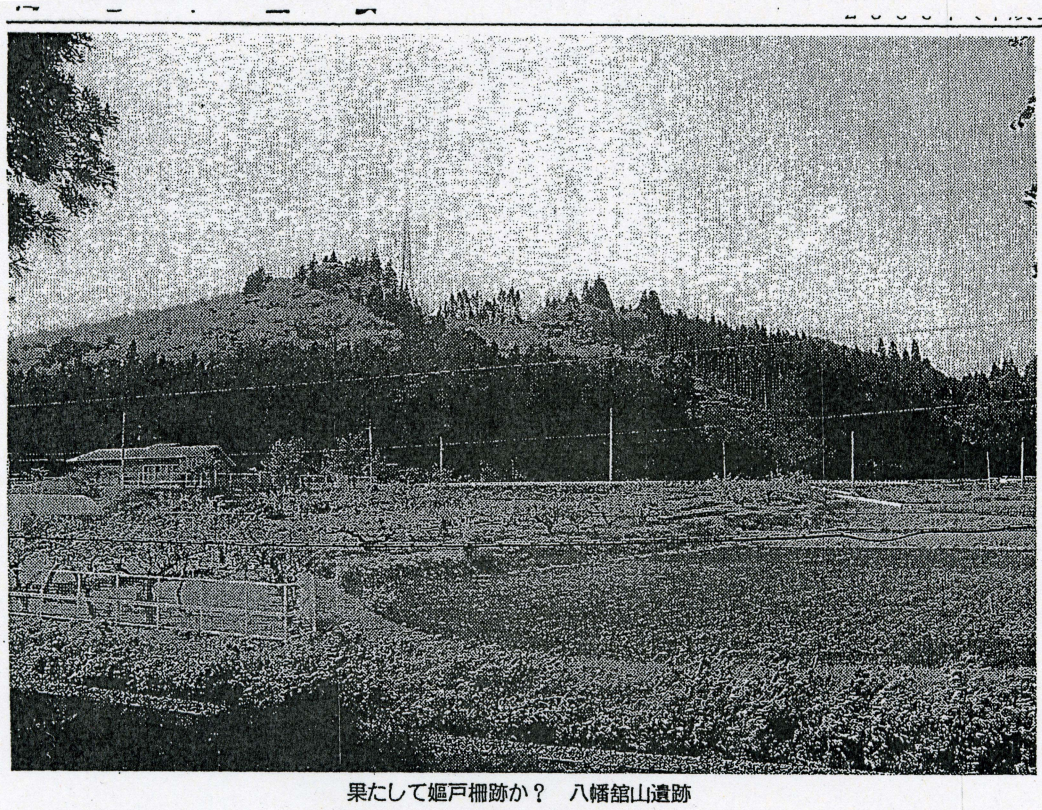
大釜舘跡で、台地と川の境と見て取れる場所の段差はおよそ1㍍程度しかなく、ここが舘の先端とするなら防御に心細い。発掘調査で川と台地の標高差は3㍍はあったという。

「陸奥話記」によると厨川柵は西北は大澤、2面の川でさえぎられ、川岸（東側）の高さは3丈（1丈は約3㍍）というから10㍍近い断崖が壁のようになって簡単には渡れない場所だったことになっている。

大釜舘跡は先端の両端を川が流れる形にはなっているが、西北ではない。近くに大澤地区があるが、果たしてこの地区のことを指しているのか。

長年史跡や遺構を調べ続けている岩手考古学会顧問の武田良夫さんは、半島のような大釜舘の地形について「川幅が迫っていれば蛇行するのだろうが、半島の両面に沿った流れ方での蛇行はしない。力の関係で必ず蛇行はするが、小さければ段丘の下に小さい川が残る。絶対ないとは言えないが、がけの両面が挟まれるような川になるというのは難しい」と話す。

前九年合戦が行われた10世紀半ば、雫石川はどの付近を流れていたのか。「陸奥話記」に記されているような要害の地に大釜舘が成りうるのかで、判断が分かれる。（荒川聡記者）



果たして堰戸柵跡か？　八幡舘山遺跡

堰戸柵はここ？

盛岡に刻まれた歴史の足跡

八幡舘山遺跡

安倍氏④

大釜舘に続いて、1キロほど離れた場所にある八幡舘山を考えてみた。同遺跡は標高246・8㍍の山の山頂から中腹にかけて痕跡がみられ、山頂から見下ろすリンゴ畑と田沢湖線を挟んで八幡宮がある。遺跡からは大釜舘と同様に平安時代の遺物が出土している。地域では大釜舘を厨川柵とし、八幡舘を堰戸（うばと）柵と推測している。

八幡舘山の頂上に東北電力の鉄塔がある。鉄塔まで通じる道は定期的に切り払いをして作業道として確保されている。登り口から50㍍ほど進むと、薄暗い森から一転して太陽の日射しで明るくなる。鉄塔から直線で数十㍍の地点には空堀がくっきりと見える。

20分ほど作業道を登ると山頂に達し、辺りは千ケ窪と呼ばれている。3、4㍍の段差があり、大釜舘を含めて一望に見ることができる。杉林の広がる森の両端は500㍍はゆうにある。

千ケ窪について地域では、安倍貞任が八幡太郎義家軍の侵攻を食い止めるため、ここに1千人の兵を潜ませていたという話と、逆に義家軍が1千人の兵を潜伏させていたという正反対の伝承が残っている。

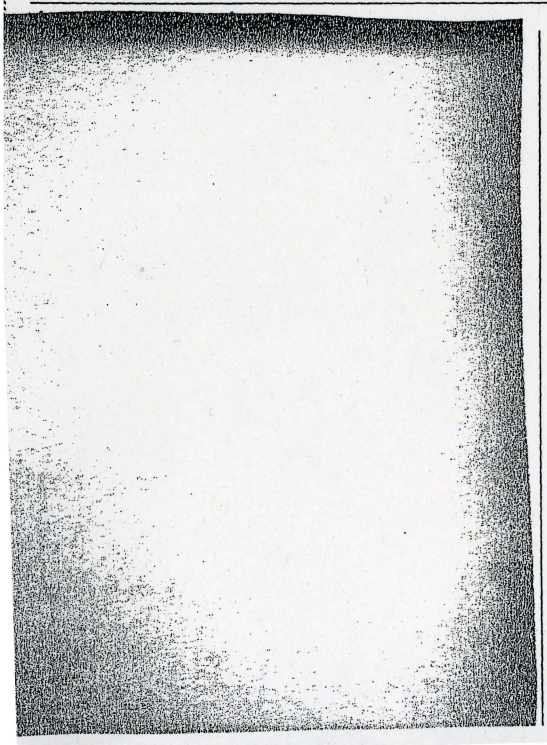
見下ろす右下の森がドンツク八幡神社

八幡舘を調査したあと、線路際にある八幡宮（石の鳥居に記載）に移動した。岩手県神社名鑑（1988年、岩手県神社庁発行）には「八幡神社・通称・ドンツク八幡サマ」とあり、創立は定かではないが、康平5年（1062年）、前九年合戦の折、源頼義・義家親子が武運を祈願し勧請した一社ともいう。安倍八幡とも呼ばれ、前九年合戦の勝利を感謝したと伝えられる。

ドンツクの意味について「蝦夷（えみし）から転訛せるものにして小丘の意に非ずや」と古書にある」と、神社の由緒には記している。

秋田岩手横軸連携交流会の大畠政夫さんは、八幡舘と八幡神社の一帯を堰戸柵（うばとのさく）と推定する。舘と神社の間がすり鉢状になっており、別々にあったのではとする。「当時はもっとなだらかだったと思う。2つがつながっているならば陸奥話記のように多くの兵隊もることができた考える。

（荒川聡記



不足する物証

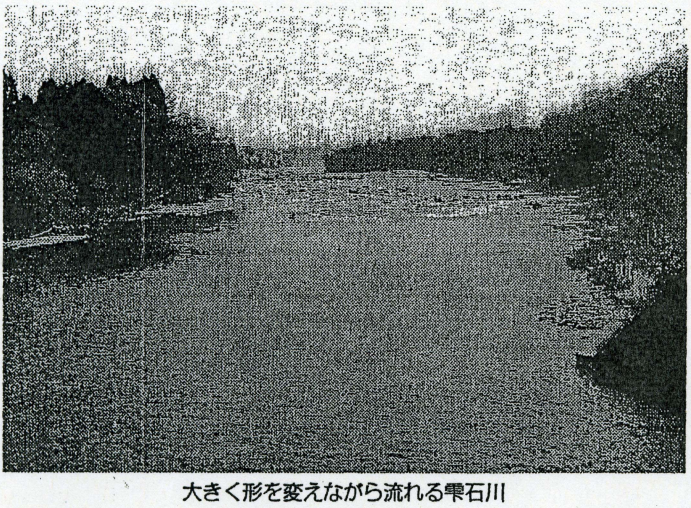
盛岡に刻まれた歴史の足跡

雫石川はどこを　安倍氏⑤

大釜舘と八幡舘山は安倍氏時代の防御施設であったことは確かなようだが、そのまま厨川柵、嫗戸（うばと）柵とするには十分な物証がない。この時代の柵がいずれも100㍍に満たないのに比べ、八幡舘の246・8㍍は標高が高すぎる。大釜舘は陸奥話記にあるような守るのに適した場所だったのか。

1千年前の地形と現在は川の流れ方をはじめだいぶ異なることは確かだが、それにしても陸奥話記に書かれている地形のイメージとは合わない。この時代の柵に見合った標高差があり、川を含めて考えていくと厨川近辺ということになってしまう。しかし、遺跡からは平安時代の遺物は何も出てこない。

雫石川の流れの痕跡を記した川跡地図（国土地理院作成の治水地形分類図盛岡・小岩井農場周辺地図）をみると、雫石川が数百㍍の範囲で東西に大きく流れを変え大釜も川底だった時代があることが分かる。安倍氏の時代に川がどう流れていたかが、詳しく分かれば大きな手がかりになる。



大きく形を変えながら流れる雫石川

岩手河川国道事務所元職員の米沢谷誠悦さんは「もともと低いところに土砂が置かれると、邪魔して左に行ったり、右に土砂が来ると左に行ったりして扇状地系の谷の出口で首振り現象が発生する。このため11世紀の川の様子を知ることは非常に難しい」という。

暴れ川だった雫石川の位置を推測するのは非常に難しい。

陸奥話記によると、厨川柵は西北は大澤、2面の川でさえぎられ、川岸（東側）の高さは3丈（1丈は約3㍍）の断崖が壁のようになって簡単には渡れない場所だったとある。

大釜舘遺跡の周辺には3丈の断崖という地形は見当たらない。2面の川というのは、単純に柵の両側を別々の川が流れていたのか、もっと広範囲な地形を意味しているのかつかめない。

川跡地図を元に7人で検討したところ▽遺跡から安倍氏時代の出土品がない安倍舘、里舘遺跡は可能性が全くないのか。付近に調査していない安倍氏時代の遺跡がないか▽全く可能性がないなら、数多くの安倍氏伝説が両遺跡の付近になぜあるのか―この2点に疑問が集中した。

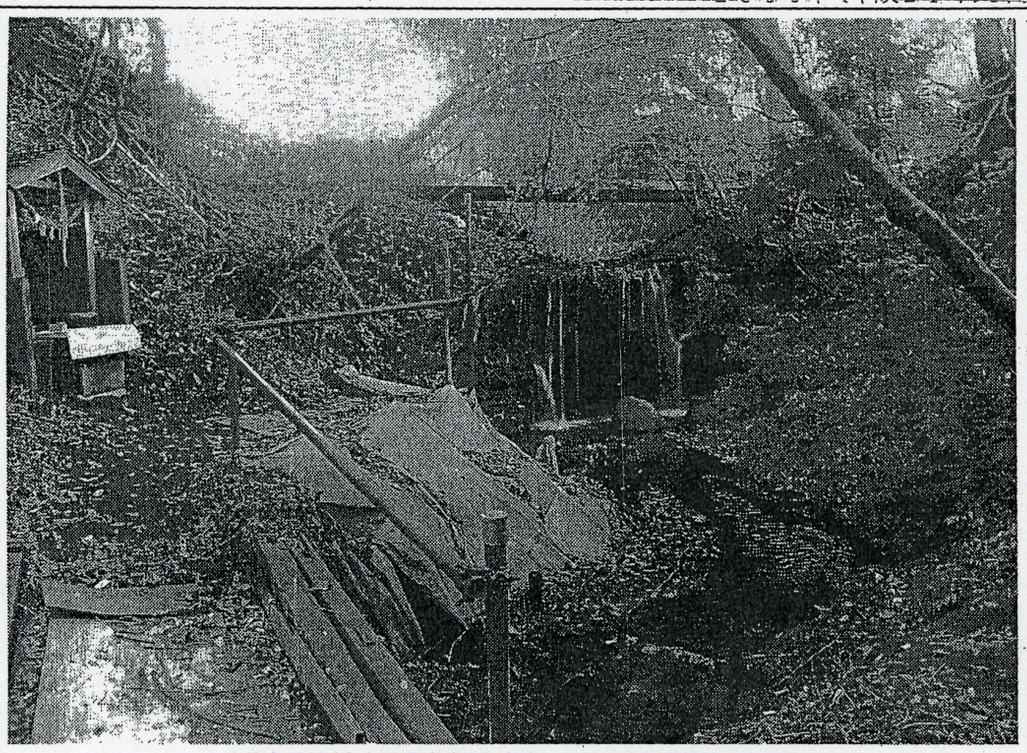
振り出しに戻って検討する必要性があるという結論だった。

（荒川聡記者）

盛岡に刻まれた歴史の足跡

玉山の伝説　安倍氏⑦

地元は貞任びいき



安倍貞任が流れ矢の傷を癒やしたといわれる滝の沢神社境内の滝

矢巾町の伝法寺遺跡前の安倍道を進んでいくと、途中でう回して南昌山ろくのぬさかけの滝前に至るという。ぬさかけの滝には八幡太郎義家が休憩したという伝説がある。義家の馬蹄石もあるという。

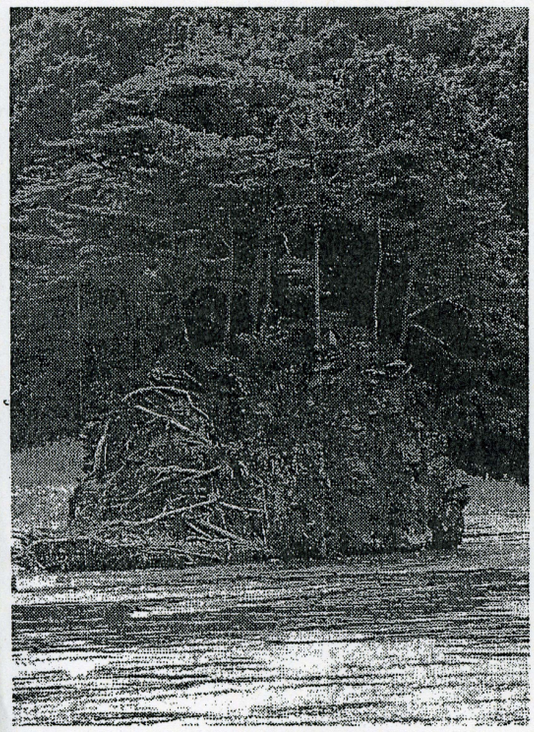
安倍氏の伝説か断言はできないが、蝦夷側で毒草を滝に流したという伝説がある。もしかしたら厨川舘に向かった樋爪氏にかかわる話かもしれない。

どちらにしても進軍する源氏軍は途中に給水場を決めていたようで、その一つがぬさかけの滝、それを狙った戦法のようだ。南昌山は別名「毒が森」とも呼ばれ、マムシが多いことに由来すると言われているが、毒草の伝説もどこかで混ざっているのだろうか。

盛岡市玉山区には「さかさ竹」という安倍氏伝説がある。同区の郷土史家の太田忠雄さんがまとめた「姫神物語」によると、領内巡視をしていた安倍貞任に賊が矢を放ち、流れ矢が片目に刺さり、貞任は生出の滝の沢神社に隠れた。神社の水で傷を癒し、刺さっていた矢は土手に突き立て、さかさ竹となって青々と茂った。

伝説の場所は生出小学校の近くにある。一間四方はある社殿の奥には一間幅くらいの滝と、ちょっとした滝壺がある。30年くらい前まではかやぶきの屋根があり、そのころには逆さの竹（逆さに見えるということらしい）もあったという。

同区渋民の門前寺舘跡は、義家が安倍氏残党を追い陣を構え、激しい戦闘が行われた古戦場。門前寺八幡宮があり表向きは義家をまつっているが、裏話に貞任をまつっていたとの伝説がある。舘の西裾、北上川の中州、松島の弁財天には貞任の妻をまつり供養したと言われている。



北上川の中にある松島弁財天

安倍貞任をまつっている門前寺八幡宮

門前寺の八幡宮と弁財天は現在は福田家の氏神としてまつっている。場所は福田家の裏から100㍍ほど進んだ場所で、門前寺山という。道筋には以前は畑があったが、現在は耕作されていないため草が生い茂っている。

このような話を聞くと、掃討作戦の中で源氏側は兵糧の現地調達をし、無関係の住民を安倍氏の残党と間違い殺害したこともあったのだろう。

安倍氏が岩手郡を支配下に置いてそれほど長くはないはずだが、中央の源氏と比べて住民からの信頼も厚く、物心両面で地域を守ってきたということだろう。（荒川聡記者）

盛岡に刻まれた歴史の足跡

「吾妻鏡」の記述は正確か

安倍宗任の娘 安倍氏⑧

亘理権大夫を名乗った藤原経清は奥州藤原氏の祖。安倍頼時の娘と結婚し、貞任や宗任とは義理の兄弟であった。経清と安倍氏の娘との間に生まれたのが清衡。蝦夷研究会の八木光則さんは「清衡の母は前九年合戦後に清原氏に嫁いだが、もともと清衡の母は清原氏の母（清衡にとっては祖母）から生まれたという説もある」と話しており、とするなら清衡には安倍氏と清原氏双方の血が流れていることになる。

前九年の合戦（1051～1062年）で経清と貞任は殺され、安倍氏の時代は終わった。宗任は四国の伊予、次いで九州の太宰府に流された。その宗任の娘と結婚したのが清衡の息子の2代基衡ということになっているが、紫波町平泉関連史跡連携協議会幹事の野村晋さんは疑問を持っている。

この記述は吾妻鏡の文治5年（1189年）9月17日にある。中尊寺の僧侶が源頼朝に存続を訴え提出した「中尊寺寺塔以下注文」の中で「基衡妻宗任女（むすめ）」と記されている。

宗任が流されたのが1062年、清衡は1056年に生まれ1128年に数え73歳で亡くなっている。清衡からみて宗任は叔父。少なくても年齢は父親と同年代だろう。基衡が生まれた年代ははっきり分かっていないが、清衡が亡くなって約30年で亡くなったようだ。

野村さんは「一説では清衡が50代のときの子といわれているが、宗任の娘が1062年前後に生まれたと考えるなら、基衡より40歳以上も年上だったことになる」と指摘する。この時代の女性の40代は孫がいても不思議でない年代。基衡が結婚できる年齢になる前に死んでいる可能性さえある。

「仮に清衡がもっと若いときに基衡が生まれ、宗任が流された先で生まれた娘を連れてきたとしても、基衡よりはるかに年上である可能性が高い」と野村さん。

これが父親の清衡とするなら、1056年に生まれており5、6歳の年齢差はバランスが取れている。吾妻鏡の記載ミスだった可能性もあると指摘する。

ただ平泉町史によると毛越寺境内に「藤原基衡室○宗任女（むすめ）仁平二　壬申年（1152年）　前鎮守府将軍基衡室　安倍宗任女墓」という碑があるという。この碑は約600年後の江戸中期の享保15年（1730年）に建立されたとあるが、この通りなら非常に長寿な女性ということになる。

（荒川聡記者）